Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

閔妃事件と外交官堀口九萬一及び与謝野寛の漢詩

西村，富美子

(Citation)
未名,32:25-44

(Issue Date)
2014-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100481821

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481821

閔妃事件と外交官堀口九萬一及び与謝野寛の漢詩

西村富美子

堀口九萬一、号長城は日本最初の外交官であり、漢詩人でもあった。慶応元年（一八六五）に生まれ、昭和二十年（一九四五、享年八十歳）に歿しており、その生涯は幕末から明治・大正・昭和の時代にわたる。亡くなったのは太平洋戦争の終戦二ヶ月後の十月末のことであった。出生地は新潟県長岡、父は長岡藩士で戊辰戦争で戦死し、母・妹と掘建て小屋での生活を送った。が小学校に入学と同時に「蒙求」「論語」「孟子」を読み、卒業後は小学校教員また校長を務めたが辞して長岡中学に進学し、翌々年司法省法学校（東大法科大學）に入学し仏語、仏国の法律を学んだ。在学中に結婚し長男の大学が生まれ、卒業と同時に第一回外交官領事官試験に合格して、日清戦争中に領事官補として朝鮮仁川に赴任する。極貧の生活の中での苦学の末に九萬一の将来に一筋の光明が見えたのは明治二十七年（一八九四）、二十九歳の時であった。(一)

しかし翌二十八年に思いがけない事件が起きその外交官人生は大きく負の方向に暗転した。歴史に名を残す所謂閔妃事件である。この事件との関連は不可抗力であったのか九萬一自身の積極的な意志あるいは職務意識のなせる業であったのか容易に判別のできないところがあるのだが、結果としては九萬一の外交官生命を根底から損なう致命的な一大事に至ったのは確かである。この事件が人並み優れて漢詩の創作に堪能であった九萬一の才能に起因したのは否定できない事実である。更に漢詩との関連からいえば九萬一だけでなく他にも波及しており閔妃事件の傍証の一つとして考えてみようというのが本稿の主旨である。

先に閔妃事件について簡単に述べておけば、明治二十八年（一八九五）十月八日、李朝の第二十六代李太王（高宗、諱は熙）の皇后閔妃（別名明成皇后、一八五一～九五）殺害の悲劇、所謂「乙未の変」とも呼ばれる事件である。当時の日本公使三浦梧楼が親露派の閔妃一族と反目し親日派勢力の回復を画策して周囲の数人と協議し、閔妃の政敵大院君を担ぎ出して景福宮に突入し閔妃を襲撃したのである。しかしこの変事は意外な結末となり、三浦公使以下多数の関係者は日本への帰朝命令により広島刑務所に収監されたが大半が不起訴となった。九萬一もその中の一人であったが翌年に復職して中国湖北省の沙市に領事として赴任し、以後オランダ、ベルギー、ブラジル（二等書記官）、スウェーデン（一等書記官）、メキシコ、スペイン等に在勤、ブラジル特命全権公使ついでルーマニア公使を経て、大正十四年（一九二五）四月に退官、帰国後に東京都小石川区久世山に住居した。その後昭和二十年（一九四五）死去の時まで、講演・執筆等で精力的に活躍した。(二)

漢詩の才能が自らの災難の因となったというのはあまり他に例を見ない聞かない話であり、後に自らその時の状況を克明に記した随筆もあり、漢詩や事件後の感懐を述べた漢詩を詠み、九萬一の漢詩集『長城詩抄』にも収められているのだが、閔妃事件当事者の心情を暗に語る貴重な資料でもあると解釈できるだろうと考える。(三)

さらにその時京城で歌人落合直文の弟、鮎貝槐園の経営する乙未義塾の教師をしていた与謝野寛（鉄幹）とも接触があり、寛もこの騒動に巻きこまれて拘束、広島に収監されるという偶然の異変があった。寛は直ぐに釈放され京城に戻るが乙未義塾は廃校となる。(四) 時に寛は二十二歳、まだ『明星』の主宰者となる以前のことであった。九萬一と寛は漢詩の詩友であり、九萬一は後に新詩社の同人となる堀口大学の父でもあった。寛はこの当時のことを回想して長文の序を付した漢詩を作っている。その漢詩は一般には公開されていないが、先年所蔵先の好意により翻字したものをその紀要に掲載したので、(五) 事件の傍証また詩友九萬一との交流を語るものとして、堀口九萬一の漢詩

に次いで紹介することにしたい。

○

九萬一の詩を挙げる前に『長城詩抄』についての簡単な解説をしておくならば、編集は九萬一の子息堀口大学で、昭和五十年（一九七五）、三百部限定で大門出版社が刊行したものである。大学のあとがきによれば、父九萬一の遺稿『長城詩稿』全三巻（三百三十首）から九十九首を選び、里見弴の勧めにより大学自身の「和訳を添えて出」したという。ただ残念ながらこの『長城詩抄』の原本であった九萬一の三百三十首の漢詩を収録する『長城詩稿』については所在未確認である。恐らくすでに散逸しているのではないだろうか。退官後の九萬一は考える所あって漢詩の創作からは離れ川柳や狂歌に転向し、余生は文筆と講演で送ろうと決心し二十年近い歳月を送ったことを記している。そのきっかけになったのは、『長城詩抄』に付された「漱石の詩を論じ併せて日本の漢詩に及ぶ」と題する「夏目漱石の漢詩論」を書いた後、「憶測するなら、日本人の作る漢詞の空しさに豁然大悟、気づかれた為めかも知れない」と、大学は「あとがき」で記している。大学が基づいたのは九萬一自著の『長城先生日記抄』『長城先生日記』だと記しているが両書の行方も『長城詩稿』とともにまったく所在不明である。なお『長城詩抄』の内容は七言絶句の詩が大半を占め三十年余の外交官人生の年次による排列だが、仏語また仏国文学にも造詣が深かったため仏国の詩人グールモンの漢詩訳、また歴任地での作以外に、永井荷風、会津八一等の漢詩の詩友への贈詩等も含まれており収録された詩は国際的かつ交流関係の多さを物語る珍重に値する内容である。この『長城詩抄』の冒頭にあるのが先にふれた閔妃事件に関係する漢詩なのである。大学が、父九萬一の外交官人生に極めて不利に作用した閔妃事件関連の詩をなぜ父の漢詩集の一番初めにおいたのかとの疑問はあるが、外交官としての初任地また初任務となった偶然のもたらした不運事であり最初に載せざるをえなかったのかも知れない。ただし閔妃事件に

九萬一がどの程度関係したのかは諸説があって、事前工作だけであったのか当日の集団的乱入の実行にも加わったのか真相は謎に包まれている部分がある。(六)

○

その詩は、閔妃事件の後三浦梧楼公使其の他の関係者と日本へ強制送還の身となり広島の監獄に収監されていた時に詠まれた七言絶句五首である。

九萬一の五首の漢詩、大学の和訳を挙げた後に、筆者が書き下し文と簡単に詩意を記した。

明治二十八年十月韓國之變　獲譴繫於廣嶋　獄中之作　記感也　五首　（堀口大学訳）

一

一劍風雲記愴神　命がけとは兼ねての覚悟
殺身只是欲成仁　仁義とあらば身も殺そうさ
孤忠應有皇天鑒　誰も知らない気持ちを抱いて
獄裏空爲縲紲身　牢屋の奥に身はつながれて

二

埋骨韓山私所期
檻車一去壯心悲
廣陵半夜感無窮
窓外西風落木時

韓山(からやま)に骨を埋(うず)める覚悟なら兼てしていた
護送車で任国退去とは意外で心外
広島の夜半のねざめの思いは千々よ
獄窓　外は木枯

三

此身何日免幽囚
有母倚閭應結愁
萬感填膺悽不睡
風簷露檻夜悠々

放免の日はいつの事
わびしく門(かど)に待つ母者(ははじゃ)
迫る思いに今夜も不眠
軒打つ風がまたつのる

四

病妻嘔血歸泉日
潦倒南冠繫獄時
雙涙滂沱禁不得
何人爲我哺孤兒

長わずらいの愛妻は　血を吐く病(やまい)で死にました
折りも折りとてつかまって　囚人帽まで着せられて
広島の刑務所ぐらしよ　今の僕無理ないよ　とまらぬ涙
何んで泣かずにいられるものか
親なしになった二人(ふたり)の幼児(おさなご)は誰がどうして育てて行くか

○原註：妻政子明治二十八年十月十四日死ス　　訓者註：二人の幼児、ひとりは大学、数え歳四、ひとりは花枝、数え歳二(七)。

五

四壁沉々靜似禪
析聲絶處夜如年
鐵窓不礙還家夢
容易宵々侍母前

独房の夜は静かに更けわたり　禅寺みたいだ
夜番の拍子木がとぎれると　あとは年(とし)ほど長い夜(よる)
いかつい窓の鉄棒も　夢の家路は堰きとめぬ

おかげで夜な夜な帰省して　母者（ははじゃ）のみ前にひざまづく

※「書き下し文」

明治二十八年十月、韓国の変、譴を獲、広島に繋がる。獄中の作、感を記すなり。五首

一

一剣の風雲　愴神を記す
身を殺して　只是れ仁を成さんと欲す
孤忠　応に皇天の鑒有るべし
獄裏　空しく縲紲の身たり

明治二十八年十月（八日）、韓国の変事とは閔妃事件をさし、罪を得て広島の監獄に収監され、獄中での感を記した、と実に明白に詩の題に記し、一振りの刀が引き起こした事件だが事は志と異なり、忠義の意志がむなしく獄中の囚人の身となった予想外の結果を詠う。

二

骨を韓山に埋むるは私かに期する所
檻車一たび去って　壮心悲し
広陵の半夜　感無窮にして
窓外　西風　落木の時

韓国で骨を埋めようとの期待が裏切られ、広島の監獄で、真夜中に感無量の思いをしつつ、獄窓の外に聞こえる秋風に木の葉の落ちる音を聞いている九萬一の心情をあらわす。

三

此の身は何れの日にか幽囚を免れん
母の閭に倚りて応に結愁有るべし
万感　膺を填め　悽として睡れず
風簷　露檻　夜悠悠

自分が釈放の身となる日は分からないが、故郷長岡では母が悲しみにくれていることを思い、万感胸にせまって眠れぬ長夜をなげく思いをうたう。（時に母の千代は四九歳。）

四

病妻　血を嘔く　帰泉の日
南冠に潦倒し　獄に繋がれし時
双涙滂沱として禁じ得ず
何人か我が為に孤児を哺まん

病気の妻が血を吐いて死んだのは混乱した運命のなか監獄に繋がれていた時、滂沱と涙は流れるままで母を亡くした孤児を誰が育ててくれようか、と妻子への悲痛な感情を述べる。

原注に記すように、事件の六日後の十月十四日に妻の政は故郷の長岡で死去（享年二十三歳）。結婚したのは九萬一が二十五歳、政は十八歳で、東京帝大の学生であった。訓者（大学）の注にあるように、大学は四歳、花枝は二歳、この二人の幼児を残しての死であった。

五

四壁沈沈　静かなること禅に似たり
柝声絶ゆる処　夜年の如し
鉄窓　礙げず　家に還る夢
容易に宵宵母前に侍る

静かな監房の夜、巡回の拍子木の音が切れると長い夜が訪れるが、窓の鉄格子も夢での帰郷はさまたげられず、やすやすと毎夜母のそばにいる、と母への愛慕をうたう。

この五首の詩は広島の獄中で作られたものだが、五首の詩に共通するのは痛切な悲哀の情そのものである。第一首・第二首の詩には国家への忠義と信じた自己の行為が見事なまでに反転した結末への悲嘆を多少表現はしているが、事件に対する自己の真情は表明せず、第三・四・五首は、母・子・妻への愛情、率直な家族愛を表している。事前画策に異常なまでに熱心に奔走したころの九萬一の言動と比較すればその落差に戸惑いを感じさせるものがあるように思う。(八)

だが閔妃事件に対する当時のまた事件後の心情がどうであったかについては九萬一自身が語ったものは残されていないので推測の域を出ない。事件後四十年を経て、九萬一が著した『外交と文芸』の中の、「十月八日事件の発端」（無言の問答）が唯一の資料と言えるのだが、その内容は事件前の九月二十日過ぎの事であり、四十年という長い歳月の経過とともにかなりドラマチックな記述の様式、内容に信憑性の点で多少問題があるように感じられる。

○

九萬一は外交官であると同時に漢詩人でもあり、一般的にあまり知られていないことだが、『明星』の主宰者与謝野寛の漢詩の詩友であった。寛は新詩社の創設者であり機関誌『明星』は短歌を主とする同人雑誌で後に晶子も

加わって急速に発展を遂げていったのだが、若き頃の寛は短歌よりも漢詩の創作に熱心で十代のころから漢詩の同人誌『海内詩媒』（日柳三舟主宰）に投稿していた。しかし中学受験の失敗により漢詩からは一時期遠ざかった。九萬一との出会いは韓国京城が最初だったと思われるが、十五年ほど後に堀口大学が佐藤春夫の紹介で新詩社の同人となったのが偶然のきっかけで、大学の父として漢詩の詩友九萬一を改めて知ることになる。両人の間に漢詩の贈答がなされたことは分かるのだが現在はどちらか一方の贈詩もしくは答詩しか残っていずその数も多いとはいえない。だが寛が九萬一からの贈詩に対して呈上した詩の中に、閔妃事件に関わりがあり寛の他の漢詩とは趣を異にする詩があるので、九萬一の漢詩についで挙げておくことにしたい。それは先に述べた堺市博物館所蔵の未公開の漢詩の草稿の一つである。

詩は七言絶句三首の連作なのだが、詩の題に続いて実に長い序があり、序文の内容は九萬一の生涯、過去の履歴と現在の生活また九萬一との出会いから交流を述べて、最初出会った韓国京城への郷愁の思いに及んでいる。この寛の長文の序を伴う三首の詩は閔妃事件の傍証的意味を有すると筆者は考えている。なお序は長文であるため適宜分割した。もとの原文には読点が施されている。（書き下し文は筆者による。）

賡長城堀口九萬一君寄懐芳韻以呈

長城・堀口九萬一君の懐いを寄すの芳韻を賡いで以て呈す。

君越後人、家世仕長岡藩爲家老。明治戊辰之變、先考殉難。時君甫三歳、在家僕背、與先妣潛竄農家、遂倶與先妣別、而匿岩代国僧院数年。事定歸国、入柏崎某氏塾、學經書詩文、稍長由第一高等中學、進東京帝国大學。修佛國法律、既卒業、任朝鮮京城副領事。當時予亦奉職朝鮮學部、監桂洞學堂、同起臥日本領事館中、因得以相知。

君は越後の人、家は世々長岡藩に仕え家老為り。明治戊辰の変に、先考殉難す。時に君　甫めて三歳、家僕の

背に在りて、先妣と農家に潜竄し、遂に倶に先妣と別れ、而して岩代の国の僧院に匿るること数年。事定まりて国に帰り、柏崎の某氏の塾に入り、経書詩文を学び、稍や長じて第一高等中学由り、東京帝国大学に進む。仏国の法律を修め、既に卒業して、朝鮮・京城の副領事に任ぜらる。当時、予も亦た朝鮮学部に奉職し、桂洞学堂に監し、同に日本領事館中に起臥し、因りて以て相知を得。

堀口九萬一（号長城）から寄せられた感懐を詠じた詩についで呈上した、という題の詩だが、九萬一から寄せられた詩は未詳である。最初に、先述した九萬一の出生や家歴を述べる。少し補足すれば、九萬一は戊辰戦争終結後に長岡に帰るが新潟柏崎の塾で学び、後に長岡中学から東京帝大へ進学し卒業後、明治二七年（一八九四）九月に外交官試験に合格、韓国京城の領事官補として赴任した。寛の方は明治二十八年（一八九五）四月に韓国政府学部省「乙未義塾」の分校「桂洞学堂」の主管として赴任する。塾の総長は寛の短歌の師落合直文の弟、鮎貝房之進（槐園）であった。この当時に領事館で九萬一等と起臥をともにしたのが知り合うきっかけになったのだが、夏七月に寛は腸チフスを患い漢城病院に入院していた。(九)

君長予五歳、爲人倜儻慷慨、好文愛客。予亦年少氣鋭、公餘與君飲酒賦詩、好論時事。日清役後、露國勢力頓加、日韓両國之際有不可坐視者。閔妃事起、君實爲其主謀。予亦與友人鮎貝槐園、関係其事、事發悤率、君同公使三浦君、率兵及壯士入王宮。先是槐園與予赴全羅道不會其期。歸到仁川、始獲其報、既君與三浦公使以下数十人、被投廣嶋之獄。予亦被同船送廣嶋、而以不入王宮故得免。君無幾遇赦復官。

君、予より五歳長じ、人と為り倜儻慷慨、文を好み客を愛す。予亦た年少氣鋭、公余に君と酒を飲み詩を賦し、時事を論ずることを好む。日清役の後、露國の勢力頓に加わり、日韓両国の際、坐視すべからざる者有り。閔妃の事起こり、君実に其の主謀為り。予亦た友人の鮎貝槐園と、其の事に関係し、事発われて悤率、君は公使

三浦君と同に、兵及び壮士を率いて王宮に入る。是れより先、槐園と予は全羅道に赴きて其の期に会わず。帰りて仁川に到り、始めて其の報せを獲。既に君と三浦公使以下数十人、広島の獄に投ぜらる。予も亦た同じ船にて広島に送らる、而れども王宮に入らざるを以ての故に免るるを得。君幾ばくも無く赦に遇い官に復す。

九萬一と寛の年齢差は実際は八歳で五歳とあるのは寛の思い違いであろう。九萬一の人柄について、才気あり意気盛んで文学を愛し客人好きで公務の合間には飲酒や詩を賦し時事論争をした、と評する。日清戦争後の韓国では親露派、親日派の勢力が変化し日韓関係が急激に悪化して遂に閔妃事件が起きる。寛は九萬一を主謀者と記すが疑義があり、寛と槐園が事件に関係したとの記述もあり、閔妃事件の真相は諸説横行しやはり謎という外ない。当日九萬一は三浦公使や兵士壮士等と王宮に突入したが、寛はその時韓国南西部の全羅道にいて京城にはいなかった。事件後に時局は予想外の急転換をし三浦公使以下関係者は犯罪者となり寛も同じ舟で広島の監獄に強制送還されるという事態となるが程なく放免となり、九萬一も一旦非職となるが翌年二月には復職して中国へ赴任し、七月にはオランダに転任する。閔妃事件は政治的配慮からうやむやに終結処理されたしまったのである。だが免職にはならなかったものの実際には九萬一の外交官人生に大きく負の影響を与えたことは否定できない事実である。(九)

爾來卅二年、君歴任海外諸國使館、近陞羅馬尼國公使、而退官就閒、營居于東京久世山。其地高爽、遠望富嶽、而大都盛觀在指顧之間。君藏東西新古典籍数千卷、而特精通支那文學及佛國文學、日夕誦讀不倦。客來則喫煙縦談、亘文事與時事。論評剴切、後學青年多以倚賴焉。君悠遊自適、無復向江湖所求。雖然、有新聞雑誌社起君者、則君不必固辭、屢屬文以警醒世人。

爾来三十二年、君　海外諸国の使館を歴任し、近ごろ羅馬尼國公使に陞り、而して官を退き閒に就き、居を東京久世山に営む。其の地高爽、遠く富嶽を望み、而して大都の盛観指顧の間に在り。君　東西の新古の典籍数

千巻を蔵し、而して特に支那文学及び仏国の文学に精通し、日夕誦読して倦まず。客来れば則ち喫煙縦談し、文事と時事に亘る。論評剴切にして、後学の青年多く以て焉に倚頼す。君　悠遊自適、復た江湖に向かいて求むる所無し。然ると雖も、新聞雑誌社、君を起こす者有れば則ち君必ずしも固辞せずして、屢しば文を属り以て世人を警醒す。

それ以後三十二年間（明治二七年、仁川領事官補から数えて）、九萬一は世界諸国を歴任しルーマニア公使を最後に依願退官した。東京に住居したが蔵書家で中国・フランス文学に精通し読書三昧の生活をし人の出入りも多く、文化文学また時事の話題も豊富で適切な論評をし若者たちも集い、悠々自適でも隠居はせずに、指名されれば寄稿、講演等に奔走し社会にも貢献した、と退官後現在に至る生活を簡潔かつ的確に述べている。

令息大學君曾學國風于予夫妻、而今以國詩及佛國文學爲天下重。父子重舊交顧、不遐棄予夫妻、常通音問、情誼宛似姻親。

令息大学君、曾て国風を予が夫妻に学び、而今国詩及び仏国文学を以て天下の重為り。父子は旧の交顧を重んじて、予が夫妻を遐棄せず、常に音問を通じ、情誼宛も姻親に似たり。

九萬一の子息の大学が新詩社の同人となったのは明治四十三年ごろで、『明星』第一次が終刊し『スバル』が刊行された時期である。与謝野夫妻に直接熱心に短歌を学んだが、今は詩人またフランス文学の重鎮となり父子ともに旧交を大事にし親戚の間柄のようだと、両家の親密な交流を記す。

予素性魯鈍、曾久修國風而未成、所作不及社中諸才子。而夙尋國語之原本于支那古音、爲之刻苦、殆及廿年。君毎激勵不止、此一事或遂於成者、實多所負於君。頃者忝贈詩、唱和数次、追憶京城當日之事、而顧影則鬢髪蕭條、非復青春濯〃之姿。安得重出京城南大門、快馬長鞭、尋漢江楊柳里之遊哉。爲之慨然。

予素より性魯鈍、曾て久しく国風を修むれども未だ成らず、作る所は社中の諸才子に及ばず。而して夙に国語の原本を支那の古音に尋め、之が為に刻苦すること、殆んど二十年に及ぶ。君毎に激励止まず、此の一事或いは遂に成るに於いては、実に君に負う所多し。頃者贈詩を忝うし、唱和すること数次、京城当日の事を追憶し、而して顧影すれば則ち鬢髪蕭条として、復た青春濯々の姿にあらず。安んぞ重ねて京城の南大門を出で、快馬に長鞭し、漢江の楊柳里の遊を尋めんや。之が為に慨然たり。

最後の節には寛自身の短歌制作の才能の衰えに対する焦燥と苦悩の言葉を述べるが、寛の二十年来の宿願である日本語の源を中国語の古音に尋める「日本語原考」にふれる。この研究が完成の暁には九萬一の助言協力に負う所大だとの謝辞で結び、ここで三首の詩の長い序文は終わる。

なお寛が日本語原学に着手したのは新詩社が『スバル』を創刊した明治四十二年（一九〇九）ごろである。[一〇] 従ってこの詩が作られたのは序文中の「二十年」の語から昭和三年（一九二八）ごろで、寛は五五歳、九萬一は六三歳くらいである。最近九萬一からの贈詩が多く唱和すること数回、[一一] 三十数年前の互いの青春時代の記憶に思いを馳せ、もう一度韓国京城の南大門を馬で散策、楊柳里を遊行したいとの感慨に浸る。一年足らずの短い韓国滞在であったが共通の特殊な思い出として寛と九萬一の両者の心に強く印象づけられていることを思わせる。

○

朔北當年殺気多　　朔北　当年　殺気多し
書生投筆共把戈　　書生　筆を投じて　共に戈を把る
與君何日驅肥馬　　君と何れの日にか肥馬を駆りて
重拂漢江楊柳過　　重ねて漢江の楊柳を払いて過ぎらん

○

曠達胸中常有春　曠達たる胸中　常に春有り
唱和文字自通神　唱和の文字　自ずから神に通ず
詞壇才子衆星似　詞壇の才子　衆星の似し
當以先生推北辰　当に先生を以て北辰に推すべし

○

國語討原世所疎　国語　原を討ぬるは世の疎んずる所
老來訓詁惜三餘　老来　訓詁　三余を惜しむ
梅花窓底嘯還讀　梅花　窓底　嘯か還た読む
漢魏以前萬卷書　漢魏以前万巻の書
（猶嘯梅花讀漢書　猶お梅花を嘯して漢書を読む）

第一首の前半は韓国の当時の不安定な国情と両人の行動を、後半は何時か二人で馬に乗り漢江のほとりの楊柳の間を行くことを願う。序文では最後に述べた韓国への郷愁に似た思いを、詩では最初にうたっている。第二首には九萬一の作詩の豊かな才能また衆目注視の存在を『論語』を典拠にして「北辰」の存在と称賛し、第三首は寛自身現在の状況について、二十年来の課題「日本語原考」の研究にすべての時間を費やし、また漢魏以前の万巻の書籍の読書生活だと詠う。韓国の思い出、九萬一の才能、寛の日本語原考の探究と読書三昧の生活、と視点を変えた三首の詩である。

なお第三首の末句は校閲者の吉田学軒の最終校定がどちらであるのか朱筆・墨筆が交錯して判読できないのだ

が、両つの句を、一つは（　）して挙げておいた。

以上が与謝野寛が堀口九萬一に呈した長文の序と三首の詩であるが、序文の実に詳細な内容、緻密な構成から何らかの資料を参考にしたことは推測されるのだが、その拠り所は分からず、寛の漢詩のなかで堀口九萬一に贈呈したこの詩は特殊な存在でもある。吉田学軒の添削は経ているが、清書されて実際に九萬一に贈られたどうかも未確認である。だが特にこの詩の序文の内容は、堀口九萬一自身の生涯、また与謝野寛との関連事項、閔妃事件や子息大学、また寛の「日本語原考」研究との関係等、長文ではあるが、簡潔な文章でまとめられている。また序文、詩において寛が特に重点をおいているのはやはり強烈な印象が記憶に残る韓国での事件ではないだろうか。

○

閔妃事件という歴史的事実は歴史書の記すところだがその真相は十分には解明されていない。事件の起きた日、明治二十八年十月八日と、何が起きたのかという事実だけは確実だが、事前の経緯、事情、また事件の全容については諸説にも疑問点があり、同じ人物の記述にも齟齬があって正確なところは究明の方法がなく、人間の記憶というのは曖昧で信憑性に乏しいという外ないのであろうか。しかしこの事件に二人の漢詩人、一人は事件にも深く関与した外交官である堀口九萬一、今一人は『明星』の主宰者で歌人また文筆家である与謝野寛、この二人が何らかこの事件に関与し、関与する漢詩を作っている。それは稀薄ながら閔妃事件の傍証的存在としての意味をもつものとして考えられないだろうかと筆者は考えている。本稿では、九萬一の五首、寛の三首を挙げるに止めたが、他にも事件解明の傍証となる資料はまだ残されていることを付言しておきたい。（一二）

注

（一）堀口九萬一の漢詩集『長城詩抄』に付された「長城先生略年譜」による。なおこの「略年譜」は九萬一手記の「長城先生年譜」及び九萬一手記の「長城先生日記抄」から大学が抄録作成したものである。

（二）『長城詩抄』に付された注（一）の「略年譜」及び大学作成の「堀口九萬一任地歴」による。

（三）『外交と文芸』の「事件の発端（無言の問答）」、昭和九年（一九三四）刊、東京第一書房。なお『長城詩抄』については先に文中に記した。

（四）「与謝野寛年譜」の明治二十八年（一八九五、廿三歳）の項に、「四月「二六新報」を辞し、韓国政府学部省乙未義塾の教師に赴任し、その分校の一たる桂洞学堂を主管す。（略）。乙未義塾は去年渡韓せる落合先生の令弟鮎貝房之進君が総長として経営せるものなり。此夏腸窒扶斯を病み漢城病院に療養す。十月朝鮮王妃閔氏殂落事件あり。この前後に亙り、堀口九万一・鮎貝房之進両君等と画策する所あり。偶ま鮎貝君と木浦に遊びたる間に、豫期に先だって王妃事件起こり、寛は一日後に京城に帰れるを以て王宮に入らず。次いで公使館一等書記官杉村濬、副領事堀口九万一等外数十人と広島に護送せられたるも、豫審判事は取調の上に寛を免除せり。（略）十二月また京城に赴く。乙未義塾廃せらる。」と事件の顛末に関する記事が見える。

（五）西村富美子「「堺市博物館蔵　与謝野鉄幹の漢詩の草稿」について」（『堺市博物館研究報告』第三一号、堺市博物館編集発行、平成二十四年三月）に掲載した堺市博物館所蔵の与謝野寛の漢詩の草稿は二十首余りあり、用紙は薄い半紙様の和紙に書かれており、校閲者吉田学軒（増蔵）の朱筆による添削の跡がある。ただし寛の修正の墨筆の跡もあるうえに学軒の添削の箇所が多くまた再三加筆訂正されているので、最終校定の字の判読が難しい所がある。この詩は三枚の用紙に書かれているが、長文、細字のうえに添削の朱筆が多く、第三首の詩の末句が未校定のままで掲載した。なお校閲者の吉田学軒は、森鷗外を介して知り合った寛の晩年の漢詩の師であり、先に挙げた寛の年譜にも「大

正十二年、吉田増蔵先生に師事し、説文及び漢詩の教を受く」と記し終生にわたり漢詩其の他の教えを受けた。なお吉田学軒は、東京帝国大学を卒業後、奈良女子高等師範教授、宮内庁圖書寮編修官等を歴任し、「昭和」の元号の考案者でもある。

（六）『明星』（第二次、第五巻第五号、大正十三年十月、一九二四）所載の「沙上の言葉」に、寛は「明治廿七年に自分は廿二歳であったが、（略）落合先生の令弟の槐園君は早く外国語学校の朝鮮語科を出て県会議員などをして居た人であるが、日清戦争が起こると直ちに朝鮮へ行ってしまった。翌廿八年になって同君は朝鮮政府の学部省に入り京城に五箇所の官立学校「乙未義塾」を建ててその塾長に任ぜられたので、自分も同君に招かれ二六社を辞して四月に出発した。（略）自分も学部省に奉職し桂洞にある乙未塾の一つを主宰した。（略）京城では日本領事館に槐園君と共に仮寓して居たので、領事官補をして居た今のルウマニア公使堀口九萬一君（略）などと親しくなった。堀口君は現に「明星」同人である大学君の父である。自分は其年の七月に傷窒扶斯に罹って漢城病院に入り一時は危険だと云われたが幸に回復した。此冬の十月八日に起こった閔妃事件と云うものが、その最初は堀口君と槐園君とが漢城病院の自分の枕頭で一所に計画した事であった。それから両君は韓装をして閉居中の大院君を訪い、一回の会見で或る密約が出来それから堀口君が三浦公使を説いたので、（略）三浦公使は堀口君献策に聴くと同時に（略）民間有志とも議る所があって終に大院君の名に由るクゥデタアが実行された。後の史家が日韓併合史を書く際に、かの事件が二三の気を負う白面書生の幻想に本づくと云う裏面の觀察を等閑にしてはならないと思う。

しかし十月八日の夜の劇的光景には槐園君と自分とは参加しなかった。（略）其中にいよいよ関係の日本人は悉く広島の裁判所へ御用船で護送される事になった。（略）関係者は俄に悲喜地を代えたので皆暗涙を呑んで悲壮な光景を呈した。自分はわざと嫌疑を避くるために自ら求めて堀口君と同じ船で広島へ護送されて来たが予審判事の調べで当夜

王宮へ入らなかった事が明白になったので直ぐに釈放された。

それから暫く広島に滞在して獄中の諧友に差入をしたりしてその十一月に再び京城へ行った。今から思うと自ら苦笑する外は無いが其頃の自分と云う小さなドン・キホオテは柄に無く一かどの志士気取で居た。」と事件の事、また事件後の処理、自身の自嘲的感懐を記している。事件三十年後のことである。

参考文献として次の著書を挙げておく。

角田房子『閔妃暗殺』一九八八年一月、新潮社（新潮文庫　一九九三年七月）

工藤美代子『黄昏の詩人　堀口大学とその父のこと』二〇〇一年三月、マガジンハウス。

柏倉康夫『敗れし国の秋のはて　評伝堀口九万一』二〇〇八年、左右社。

（七）「原注」は九萬一、「訓者注」は大学が記したもの。ルビは大学が付したものである。なお九萬一は妻政の死の四年後、ベルギー留学中にジュッテルランドと再婚し、岩子・瑞典の一男一女をもうけている。堀口家の共通語はフランス語であったと大学は語っている。

（八）『外交と文芸』、「十月八日事件の発端　（無言の問答）」（東京第一書房、一九三四年七月）に詳細な記述がある。事件後四十年を経て書かれたものである。「僕が外交官生活をしていた三十余年の長い年月の間にも、これほど不思議な事件に出逢ったことは、後にも先にも、唯った一度しかなかった。実に文字通りに空前絶後。その事件も空前絶後だが、其の事件に達する迄の径路もこれ亦空前絶後で、恐らく日本の外交官でも、外国の外交官でも、だれもまだ経験したことの無いことだろうと思う。それは何かと言えば無言の問答である。常識では、無言の問答などは有る筈のものではないが、実際あったのだから実に不思議だ。しかのみならず而かもそれで至極要領を得て、十分にその目的を達したのだから尚更以て不思議なわけだ。場所は、朝鮮京城。時は明治二十八年九月。恰度日清戦争が終わった直後

のことである。当時の公使は陸軍中将三浦梧楼氏、而して僕がまだ官場の初舞台、領事官補であった時の話だ。」という前置きがあって、駆け出しの外交官九萬一は三浦公使から重大な要件を依頼される。親日派の勢力挽回のために国王高宗の厳父大院君（現在孔徳里離宮に蟄居中）の再起を促す交渉役を務める。内容を聞かれないように筆談の方法しか無く大院君は漢学の素養があり君が適任者だと言われ承知する。事の成り行きだったのだろうか其の時の九萬一の心情はいささか不可解だが、大院君の幽閉地功徳里へ馬で出向いた。其の時の九萬一の服装は観光客風の五ツ紋の黒絽の羽織、仙台平袴で、無事通過した九萬一は大院君に面会し、上等の湖筆巻紙を賜って漢文と七言絶句の即興の詩の応酬によって交渉を開始し、両者の間に交互にそれぞれ三首の七言絶句の詩の応酬があり交渉は成立したという。

（漢詩はまた別の機会に紹介することとし省略。）

（九）注（四）の「与謝野寛年譜」、及び注（五）の『明星』（第二次、第五巻第五号）所載の「沙上の言葉」参照。

（一〇）寛は「日本語原考」を、『明星』第二次の第一巻第六号（大正十一年四月号）から『冬柏』の第六巻第二号（昭和十年一月）、三月に死去する二ヶ月前まで掲載し続けた。

（一一）昭和三年初頭のころには、九萬一と寛の間には漢詩の応酬がかなり頻繁であった。そのことを証する資料もあるのだが未公開である。この詩はその中の一つかも知れない。

（一二）西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩――『明星』第二次時代の漢詩人与謝野寛」（『東海学園　言語・文学・文化』第八号、二〇〇九年三月）。

同「外交官漢詩人　堀口九萬一の詩作年譜」（『東海学園　言語・文学・文化』第九号、二〇一〇年三月）。

（にしむらふみこ・三重大学名誉教授）